

第2回エメックス会議挨拶

エメックス93開会式（11月10日）における貝原知事の歓迎挨拶

メリーランド州シェーファー知事をはじめご来賓の皆様、エメックス93に皆様方とともに出席できましたことは、私にとってこのうえない光栄に存ずるところであります。



メリーランド州シェーファー知事をはじめ、メリーランド州政府とメリーランド大学のスタッフがかくも盛大なエメックス93を開催されたことについて、お喜びを申し上げますとともに、敬意を表したいと思います。

さて、日本は4つの大きな島とその他の小さな島から成り立っていますが、その4つの大きな島のうち本州、四国、九州によって囲まれた内海があります。

それは、面積がチェサピーク湾の3倍弱であり、エーゲ海にも匹敵する多島美を誇る瀬戸内海であります。

この瀬戸内海は、日本の臨海工業地帯の発展とともに環境汚染が進み、1970年代において死の海への危機にさらされました。そこで、沿岸の自治体が瀬戸内海環境保全知事市長会議を設立し、以来、日本政府・環境庁と共に埋立てや工場排水の規制、生活排水処理施設の整備などに努力をしてきました。

これらの努力の結果、危機的な状況は回避することができ、水質が悪化することを停止させることができました。

しかし、この瀬戸内海の沿岸地域には3400万人の人が生活しており、これらの人達の豊かな生活と環境の保全を両立させるためには、政治、経済、科学技術、教育等多くの分野でまだまだ数多くの課題を克服しなければなりません。

そのような苦心をしていた1987年、メリーランド大学からイアン・モリス博士をはじめとする方々が兵庫県を訪問され、意見交換をしました。その時、私は、閉鎖性海域の環境の保全と活用に同じ悩みを持つ各地域が、その解決のために有効な知識、技術、情報等を共有し、協力しあうことの重要性を認識し、後日、そのための国際会議の開催を提唱しました。

この提案は、幸い多くの人々の賛同を得ることができ、その結果、世界閉鎖性海域環境保全会議（エメックス90）が1990年日本国兵庫県神戸市で開催され、世界42カ国から1238名もの参加があり、採択された「瀬戸内海宣言」にあるように今後の閉鎖性海域の取り組みについて、強力な政治的指導力と関係者による沿岸管理へのアプローチの必要性の合意形成など多くの成果を得ることができました。

その後、兵庫県はエメックス90の成果を生かすため、研究者で構成されている瀬戸内海研究会議を

支援するとともに、閉鎖性海域に係わる研究者間の情報交換を促進するための国際ネットワークの構築を推進しています。また、1990年以降、発展途上国から行政担当官を受入れ、閉鎖性海域の環境管理技術移転のための研修を実施してきました。これらの兵庫県の国際活動に対して、世界の閉鎖性海域を持つ国の研究者や団体から強い関心を寄せられ、ネットワークの実が広がりつつあります。

昨年ブラジルで開催された地球サミット（UNCED）で採択された「アジェンダ21」においては、「各国、各地域及び全地球的のレベルで、海洋及び沿岸域の管理と開発に対して新しく、内容においては統合され、また、範囲においては将来を先取りした予防的アプローチが必要である」とされて種々の行動計画が示されたことは記憶に新しいものがあります。

こういう状況のもと、エメックス90に引き続き、エメックス93において世界の閉鎖性海域の環境保全に携わる研究者や行政関係者、住民団体等が交流を深め、閉鎖性海域の恵みを次の世代に引き継いでいくため、閉鎖性海域の環境の保全と適正な利用に関する諸問題に対応する道を探究していくことは極めて意義深いと考えています。

この機会に私は、1990年、1993年と開催されたエメックス会議が今後更に継続して開催され、世界の閉鎖性海域の環境保全へ貢献することを望みます。

また、そのために、エメックス会議の継続開催を推進する母体となるとともに、国際的な閉鎖性海域の環境保全活動を推進するための国際的組織を設立することが有益であると考えます。また、こうした気運は最近とみに高まってきたと認識しています。

そこで兵庫県を代表して私は、ご出席の皆様をはじめ、関係者、関係機関の協力を得て、国際的組織を日本国兵庫県神戸市に設立する用意がある旨表明したいと思います。

この国際エメックスセンターは、エメックス90以来兵庫県が中心となって進めてきたことを一層発展させるものとして想定しています。会議期間中において、世界からエメックス93に参加した学者や行政関係者、住民団体、国際機関の皆様からこの国際的組織の設立に対するご理解と認識が深められ、世界的な合意のもとに設立されることを期待します。

最後に、この会議の成功に向けてご尽力されたシェーファー知事をはじめ、メリーランド州やメリーランド大学のスタッフの皆様へ感謝の意を表し、会議の開会にあたっての挨拶とします。